

第三十三回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

サンドラ・シャル著『『女工哀史』を再考する—失われた女性の声を求めて』

(2020年2月20日刊 京都大学学術出版会)

Sandra SCHAAL サンドラ・シャル

ストラスブール大学（フランス）言語学部日本学科 教授、京都大学大学院文学研究科 特任教授
1975年4月2日生まれ 45歳 フランス ストラスブール（STRASBOURG）市出身
専門は、日本近現代の歴史社会学、ジェンダー・スタディーズ

1997年7月、ストラスブール大学人文科学部学士課程外国語（日本学）専攻卒業（学士号取得）。
1999年7月、フランス国立東洋言語文化研究所（INALCO、パリ）日本学専攻修士課程修了（修士号取得）。1999年（平成11年）10月、文部科学省国費留学生（研究生）として来日（京都大学文学部社会学科）。2001年（平成13年）7月、京都大学大学院文学研究科博士後期課程行動文化学専攻（社会学）編入。2006年（平成18年）3月、京都大学大学院文学研究科博士後期課程行動文化学専攻（社会学）修了（博士号取得）。2006年（平成18年）9月、ストラスブール大学国際言語文化学部日本学科非常勤講師。2007年（平成19年）9月、同大学准教授。2016年（平成28年）4月、京都大学大学院文学研究科特任教授（現在に至る）。スーパーグローバル大学創成支援「ジャパングートウェイ構想」≪The Asian Platform for Global Sustainability & Transcultural Studies (AGST)≫に参画。2020年（令和2年）9月、ストラスブール大学言語学部日本学科教授（現在に至る）。

近刊書に *The World of the Mill Workers in Prewar Japan: A New Look at a Sad History*（Brill、2021年）、*Modan. La ville, le corps et le genre dans le Japon de l'entre-deux-guerres*（Picquier、2021年）。共著に、*Educations sentimentales. Normes et représentations des relations amoureuses et sexuelles en contextes orientaux*（PUS、2019年）、*Corps et message. De la structure de la traduction et de l'adaptation*（Picquier、2019年）、*Censure, autocensure et tabous*（Picquier、2011年）がある。

受賞のことば

和辻哲郎はヨーロッパ思想と日本的な思想の止揚を目指した哲学者であり、ヨーロッパ人としてその名前を冠した名誉ある賞を賜りましたことを誠に光榮に存じます。

本書の目的は、「女工哀史」的視点に対する歴史的批判的アプローチを用いながら、戦前日本の製糸女工たち自身の声（聞き取り調査や糸引き歌）に耳を傾け、彼女たち自身が語っている経験と自己イメージを分析することにあります。

当初、「女工哀史」的視点の妥当性を確信していた私は、特に女工たち自身の声が示しうるレジスタンス精神に注目しようと考えました。ですが、それらの女工たちの声が、抑圧や搾取に関する経験

などの非常に暗い描写に終始するのではないかという予測に反して、むしろ彼女らの日常が社会的・文化的に独自のリアリティを持ち、必ずしもネガティブな側面ばかりでないことが明らかになったのです。この「発見」により、私は女工たちの生活史について新たな解釈の可能性を探求するようになりました。このようにして本書は、当初想像もできなかったような驚くべき、そして素晴らしい学術の旅路に就くこととなったのです。

本書は歴史社会学の専門書ですが、様々な分野の方々にも読んでいただけたら、という願いを込めて執筆いたしました。

《選考委員評》

阿刀田 高

内容も文章もすばらしい

細井和喜蔵が綴った『女工哀史』が刊行されたのは大正 14 年（1925）のこと。現在でも岩波文庫に収められているが、その解説目録には“紡績業は日本の資本主義の発展にあずかった基幹産業の一つである。ヒューマニスト細井は、この産業を底辺で支えた女子労働者たちの苛酷きわまりない生活を自らの体験と調査に基づいて克明に記録した。本書を繙く者は誰も、近代資本主義の残した傷痕のいかに深く醜いかにしたたかに思い知らされずにいない”と紹介されている。私は不明にしてこの原典を読んでいないが、太平洋戦争以前の苛酷な時代を考え、深い思案もないままに、

——ひどい状況だったろうな——

と想像していた。そしてこの本から生まれた“女工哀史”という言葉も戦前の女子労働者に強いられた奴隷的（とさえ見られる）労苦を示すものと考えていた。

しかしサンドラ・シャル氏の労作は、そこに疑念を抱き、往時の女工等の生活がそれだけのものだったのか、少しちがうぞ、そこをスタートとして入念な調査・分析をしたためている。そこには敗戦直後の左翼主義者の思惑が強く働いていた、という指摘も、この時代を生きたものとして私には“ありうるね”と思えることであつた。

往時の女子労働者が苛酷な労働環境にあつたことは事実だろうが、本書が示すように彼女等は生家にあつてもけつしてまともな生活が保証されていたわけではなく、むしろ“女工”と言われた組織的労働環境のほうが優れた面があり、このあたりを正確に見るほうが社会史として肝要と、この視点は正しいと思う。多くの資料を調べつくし、女工たちの糸ひき歌を楽しく引用しながら綴られた内容はみごとである。

それにしても紛れもないフランス人である著者がどうしてこれだけ確かな日本語文を綴ったのか、このあたりの事情について私にはまったく知識がなく、だがなにはともあれ結果として完璧な日本語文であることは驚嘆であり、高い評価を受けるべき特色であろう。さらに言えば、

——文化・研究のグローバリズムが新しいレベルに入っているんだ——

これも 21 世紀の今、本書の、刮目して見るべき長所であり、心からの祝意を表して広く訴えたいと願った。

完璧に誠実な本

完璧に誠実な本である。日本語による委曲をつくした、且つ平明な文は中断するところがない。著者はフランス人女性で、現在ストラスブール大学教授の職にある。

1999 年秋、文部科学省の国費留学生として来日し、京都大学大学院文学研究科で、著者が選んだテーマは「女工哀史」。製糸女工たちの「消えゆく声」によって得られる「事実」から「哀史」の検証に入る。しかし、「糸ひき歌」と元製糸女工の口頭の証言を採集するうちに、驚くべき体験が著者を待ち受けていた。「女工哀史」観の崩壊である。女工たちは独自の貴重なリアリティーにみちた生活を送っていた。

「糸取りってそんなへばい（ひどい）もんじゃあなかった」

映画「あゝ野麦峠」に代表される女工に対する画一的な表象、女工の哀れなイメージを強調する言説がとりわけ 1930 年代のマルクス主義者、進歩主義イデオログによって広められ、定着して行った。彼らはおおむね裕福な近代日本のエリート達であった。

このフィールドワークでの体験は、著者を「女工哀史」的視点の基礎を批判的な目で再考し、脱構築する新たな解釈の可能性の探求へと導く。

長野を中心にかつての製糸工場のあった土地を繰り返し訪れ、元女工を中心とする 70 名の語り手を対象として行った聞き取り調査は各人 3 回以上に及ぶ。〈声〉が表している彼女たちの意味世界や生活実践を記録し、精緻に読み解き、再構成し、“近代日本の工業化に関する社会理論”を拡張する試みに挑戦する。そして、10 年以上の歳月をかけて完成させたのが本書である。

「失われた時」ならぬ「失われた女性の声を求めて」と副題にもあるように、著者の「歴史」への謙虚な向かい合いと、フランスのアナール学派やポール・リクールらの歴史社会学、哲学を研究の基礎に置いた洗練された手法とが相俟って、冒頭で述べた“完璧に誠実な本”が実現すると共に、極めて優れた歴史の書、民俗学的研究の書が生まれた。

私は、およそ 1 世紀前のソビエト・ロシアの天才言語学者ニコライ・ネフスキーの日本語による日本民俗（族）学研究の書『月と不死』を思い浮かべ、深い感慨に打たれた。

歴史の固定観念を越えて ——サンドラ・シャル『『女工哀史』を再考する』を推す

知識の固定観念や先入観はおそろしい。女工と聞くと、すぐに『女工哀史』という本が思い浮かび、映画の『あゝ野麦峠』を連想する。しかし、サンドラ・シャルさんの『『女工哀史』を再考する』を読むと、明治の殖産興業を担い、近代日本の繊維産業を発展させた原動力の女性労働者の笑顔や生きる喜びもくっきりと浮かび上がる。アナル派の社会史研究の手法を引き継ぐ本書では、まだ存命中の元女工からの聞き語りと文献研究を結合させ、普通の声なき人びとの存在感が生き生きと浮かび上がる。彼女たちの唄う「糸引き歌」は、労働のつらさだけでなく、カネへの執念といった人間の本性も素直に描き、同じ会社の男工への想いや侮蔑など、人間なら誰でも抱く感情を素直に表現する。会社や管理者の（搾取）への怒りは、勤労で見返そうとする意地や、年季明けの生活への夢や展望として止揚される。

印象的なのは、少女たちが岡谷の映画館や行楽地に着飾って出かける休日の楽しみであり、正月に土産をどっさり持って帰郷する姿である。サンドラさんは、語り手の過半数が女工の生活史を悲惨と見なす従来の描写に強い違和感を覚えた事実を明らかにし、生活のポジティブな面を見つめようとする彼女たちの積極性を強調する。人間は生きる以上、どの仕事でも厳しさと試練にさらされる。それでも工場の規律と労働は、明治になって導入された新式機械の前で、彼女たちは勤労と集団生活のなかで、やがて家事を切り盛りする女性の教育の仕上げを行なう機会にもなった。三度の食事、ましてや白米を食べるのが大変な時代に食生活を保証され、現金収入の得られる職場はありがたかったのである。

彼女たちの存在は、「近代社会のきらびやかな輝きに向かって開く窓を与えた」といえよう。流れるような日本語の表現能力、読者に文章を再読させる叙述、聞き取りで元女工の老婦人たちの心を開かせたフランス人女性の繊細な感性。これらがあいまって社会史叙述を学術研究の領域を越える書物に仕上げた努力を讃えておきたい。和辻哲郎文化賞にふさわしい作品である。